

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00628

研究課題名（和文）十四世紀を中心とする縁起・絵伝の制作組織および様式系統の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Research on the Production Process and Stylistic Lineage of Shrine and Temple Engi (Origin Tales) and Eminent Monks' Pictorial Biographies in and Around the Fourteenth Century

研究代表者

高岸 輝 (Takagishi, Akira)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：80416263

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本美術史の中でも最も研究の遅れている14世紀（鎌倉末・南北朝・室町初頭）に活動した絵師の工房組織、絵師ごとの様式の特徴、さらには絵画制作を支えた武家政権（鎌倉幕府、室町幕府）や公家政権のパトロネージを分析した。絵画の様式比較に関しては、IIIFというウェブ上の画像公開の新たな規格を活用し、複数の所蔵先（美術館・博物館・図書館）で公開される画像の細部を精細に比較できるシステムの開発を行った。これらの成果は、高岸輝『中世やまと絵史論』（吉川弘文館、2020年）をはじめとする研究書、各地で開催した展覧会、シンポジウム開催という形で成果を社会に還元した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日本美術史は、たとえば平安末期や桃山時代を盛期ととらえ、それ以外の時期については谷間の時期と捉える見方が主流であった。本研究では、日本中世（12世紀～16世紀）のちょうど真ん中に位置し、鎌倉・南北朝・室町と政権が転変した14世紀を絵画の側面から再度捉えなおし、この時代に特有の様式の複層性、政権の移行に伴う絵師組織の変容を俯瞰的に把握することができた。また、IIIFを活用した画像比較システムの開発は、将来の美術史学における研究の効率化に大きく寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：This KAKEN Project is focusing on 14th century (late Kamakura, Nanbokucho, and early Muromachi Periods) Japanese Yamato-e Paintings, such as Emaki, Portrait, Buddhist Paintings. We examined these paintings thorough establishing the IIIF (International Image Interoperability Framework) viewer system. Our results has been published in Akira Takagishi "Reflections on medieval Yamato-e," and other books, and several exhibitions held in Japanese museums.

研究分野：日本美術史

キーワード：14世紀 IIIF 絵巻 美術史 絵師 やまと絵

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

14世紀の日本美術史をどう捉えるか、という本研究の課題に対し、高岸および加須屋は、2017年に刊行した『天皇の美術史』所収の論考において、それぞれ別の角度から問題を提起した。加須屋誠「十四世紀美術論—後醍醐天皇を中心にして—」は、大覚寺統・南朝の皇統が関与した美術作品を幅広く渉猟するとともに、14世紀を前期と後期に分けて主要な絵画作品の様式的特質とその変化を指摘している。高岸は、科研費「十四世紀やまと絵の包括的把握による日本中世絵画史の再構築」(基盤(C)、2015~2017年度)の成果として、「天皇と中世絵巻」を上梓した。ここでは、14世紀前半の『花園天皇宸記』に記された美術関係記事の分析を通じ、持明院統・北朝の皇統が花園天皇周辺にサロンを形成し、自らの正統性を主張する方途として絵巻を管理・蒐集・制作・鑑賞していた実態を明らかにした。また、『看聞日記』の分析から、14世紀の美術コレクションが15世紀前半においても継承・評価されたことを示した。いずれも、空白期と見なされてきた14世紀美術の総合的把握を提唱したものであり、本研究の着想基盤となっている。

2010年代に入り、国内の博物館では、縁起・絵伝を主題とする中世絵巻の全巻公開が行われる機会が増えている。「広い14世紀」の作例としては「玄奘三蔵絵」(奈良国立博物館、2011年)、「松崎天神縁起絵巻」(山口県立美術館、2011年)、「石山寺縁起絵巻」(滋賀県立近代美術館、2012年)、「一遍聖絵」(神奈川県下三館合同、2015年)制作時期がやや降る「當麻寺縁起絵巻」(葛城市歴史博物館、2010~2012年)光明寺本「遊行上人縁起絵」(最上義光歴史館、2013年)、「道成寺縁起絵巻」(和歌山県立博物館、2017年)などで、基礎資料となる図録の刊行に加え、相澤正彦・國賀由美子編『石山寺縁起絵巻集成』(中央公論美術出版、2016年)のような網羅的成果も現れた。一方、高岸・藤原が企画協力をした「絵巻マニア列伝」展では多数の絵伝・絵巻を出品し、絵巻の蒐集や享受という機能や象徴としての側面に注目した。本研究は、こうした個別の作品研究と、作品群としての把握とを総合化する試みである。また、14世紀の最重要作品「春日権現験記絵巻」は修理が進行中だが、部分画像を多数掲載した光学調査報告書(東京文化財研究所)が2017年に刊行開始された。

## 2. 研究の目的

1995年、米倉迪夫氏が神護寺三像を14世紀の半ばに位置づけたことで、美術史だけでなく文献史学の研究者も巻き込み、中世肖像画に関する議論が高まりを見せた。一方、寺社の草創と靈験を説く「縁起」、聖者や高僧の伝記を説く「絵伝」に関しては、一部の作品研究において深化が認められるものの、作品相互の比較による14世紀の体系的な把握は手つかずのままである。これら縁起・絵伝は現存遺品が比較的多く、個人による総合的な調査には限界があること、絵巻・掛幅はいずれも画面の面積が大きく、細部の図様を印刷物で確認しづらいことが、研究の進展を阻害してきた。ところが近年、国立博物館の「e国宝」をはじめ、国内外の博物館・美術館・図書館による高精細画像の公開が進み、部分比較の利便性が飛躍的に向上した。デジタル技術の進歩によって、画像に対するアプローチが劇的に改善された結果、豊富な情報を含む縁起・絵伝は、14世紀という空白地帯を埋める最善の素材として浮上した。

## 3. 研究の方法

本研究では、中世の縁起・絵伝に関し、最近10年間において実証的かつ顕著な作品研究を進めている加須屋誠・津田徹英・藤原重雄を研究分担者に迎える。研究代表者とあわせて四名の方法的特徴は、次のようにまとめられる。

高岸輝……様式比較・構図分析の融合により、長期スパンにわたる様式継承・変化の把握。中世公家日記の精読と再解釈を通じた、公武権力による美術コレクション史の構築。土佐派など絵師組織の系譜的考察。

加須屋誠…中世仏教説話画の政治・社会的受容史・享受史の構築。図像学的手法による描写内容の読み込みと、関連史料の悉皆的な収集を通じた、精密な個別作品研究。

津田徹英…詞書書風の比較に基づいた詞書染筆者の特定および制作年代の絞り込み。初期真宗教団の組織や教義解釈の精査に基づく美術制作と使用の場を描出。

藤原重雄…未翻刻資料の発掘・解釈を通じた、作品の位置付けや制作組織の再評価。同主題の絵巻と掛幅縁起絵との比較により縁起・絵伝理解を総合化。特に掛幅の大画面作品に関し、トレース図を活用して描写内容の厳密な特定を行う。

上記は、いずれも作品内部に現れた描写内容や表現様式に肉薄する視点と、文献史料を駆使した制作組織および縁起・絵伝の社会的位置づけという俯瞰的視野とを兼ね備えるもので、相互の連携による相乗効果が期待できる。そして、個別の作品研究を、後述する宗派別の六つグループに置き直し、複数の近接する作品を群として捉えなおすことを試みる。

対象とする画像データの大規模化と、細部比較の効率化を目指し、IIIF規格による画像の活用と分析ツールの開発を進める。IIIF(International Image Interoperability Framework)は画像データベース公開の新たな統一規格で、同一ブラウザ上で各地の画像を自在に比較可能である。同規格は、国文学研究資料館の絵巻・絵入本や、津田の監修のもと2016年6月に公開され

た「大正新脩大蔵經圖像部データベース」で先駆的に導入されており、海外でもメトロポリタン美術館などに導入の動きがある。本研究では鈴木親彦氏を連携研究者に迎え、試作中の IIF キュレーションビューワを実用化に向け改良する。これは、絵巻などの絵や詞書から顔や文字など部分を抽出、膨大な数量の部分画像を一覧化できるものである。IIF 公開画像を活用するとともに、既存の画像データや新規調査画像の IIF 化を進め、ビューワを用いた作品の系統・年代、染筆者や絵師の特定を効率的に進める。

#### 4. 研究成果

ここでは年度ごとの成果を挙げる。

##### (2018 年度)

初年度にあたり、研究分担者および協力者による打ち合わせを開催し、研究期間内の活動に関する方針を策定した。高岸・津田は、従前から継続している「遊行上人縁起絵巻」諸本および時宗関係絵画の調査・撮影を進め、次年度に予定されている遊行寺宝物館での「真教と時衆」展へと展開することとし、神奈川・遊行寺、静岡・海蔵寺、静岡・佐野美術館に所蔵される断簡の熟覧、撮影を実施した。また、高岸・藤原は、米国所在の 14 世紀の縁起・高僧伝の調査を行うための準備作業を進めた。IIF 画像を用いた様式比較に関しては、CODH の鈴木親彦とともに、顔貌比較のツール開発を進め、特に、「遊行上人縁起絵巻」を素材として、実際の比較作業を試行した。

年度内の研究業績として、津田「神奈川県立歴史博物館蔵一遍上人像の画讃をめぐって」は、表題作を中心に 14 世紀における高僧の肖像と伝説化を問うている。加須屋『記憶の図像学』は、広汎な時代に視野を広げつつ、仏教に関わる図像の在り方を述べた。このほか、鈴木・高岸の共著による IIF に関する口頭発表、高岸による日本の聖地の表現に関して、寺社縁起や巡礼に注目したシンポジウム発表などがある。また、高岸が米国で行った基調講演は、中世絵巻の重要作品に関して、寺院所在する現地の景観の描写に関する考察である。

研究分担者それぞれの担当テーマに関して、従前からの研究の蓄積に加え、作品の現地調査を計画・実施した。なお、海外調査に関して予定の変更があったため、研究費の一部を次年度に繰り越し、2019 年 6 月にボストン美術館およびシアトル・アジア美術館において、調査・熟覧を遂行することができた。

##### (2019 年度)

研究の二年目にあたり、CODH の鈴木を新たに研究分担者に迎え、IIF 画像を活用するためのキュレーション・プラットフォームの開発および実装をさらに推進することとした。高岸・津田を中心に進めている「遊行上人縁起絵巻」および時宗関係絵画の調査・研究に関しては、成果を反映した「真教と時衆」展が遊行寺宝物館で開催された（会期：2019 年 9 月 7 日～11 月 10 日）。期間中、本科研も共催するかたちで「真教と時衆を絵巻から読み解く—中世絵巻研究の最前線」（10 月 20 日、藤沢市ふじさわ宿交流館）と題したシンポジウムを開催、津田「詞書の筆跡から「遊行上人縁起絵」の制作年代を考える」、高岸「「遊行上人縁起絵」の画風検討を通じた十四世紀絵巻史の再構築」の講演を行った。展覧会とシンポジウムを通じて本科研の研究内容を広く発信する機会となった。

出版物としては、加須屋『仏教説話画論集』（中央公論美術出版、2019 年）、高岸『中世やまと絵史論』（吉川弘文館、2020 年）が挙げられる。前者は、古代から中世にいたる仏教絵画、絵巻などを題材とし、テキストとイメージの関係を幅広く問うものである。後者は、全 23 章からなり、中世やまと絵の絵師・パトロン・コレクションなどを俯瞰する内容である。特に第 6 部第 6 章「「遊行上人縁起絵巻」諸本の様式と年代」は、本科研の調査結果をふまえ、同主題の絵巻のなかから 14 世紀に制作された金光寺本・金台寺本・金蓮寺本・清浄光寺甲本・真光寺本を取り上げた。これら諸本の間によこたわる様式の振幅から、14 世紀において、古代から継続した古典的かつ格調の高い様式だけでなく

##### (2020 年度)

本年度の最大の成果は、加須屋『仏教説話画論集』下の刊行である。全 10 章からなる本書は、12 世紀から 14 世紀を対象とするが、特に「笠置曼荼羅小論」「本土寺蔵「観音経絵」小論」「十三世紀美術論」「十四世紀美術論」では、鎌倉時代の大画面仏教説話画の主要作例についての徹底した考究が行われるとともに、13 世紀から 14 世紀の美術史を、公武や聖俗によるパトロネージ論、仏画とやまと絵の様式論、絵師・絵師の作家論を融合し、広い時間的視野から俯瞰した。

高岸は、「中世絵巻の 作者 とその基盤—「春日権現験記絵巻」と古代宝蔵の再生をめぐって—」において、鎌倉時代後期の西園寺家周辺で、平安期の宝蔵の楽器が再生され、春日社に奉納された事例から、同家が制作させた「春日権現験記絵巻」の様式に平安末期の復古が想定されることを指摘した。また、「中世絵巻の 作者 とその基盤」(『作者 とは何か』所収)は、初期

の足利将軍家（足利尊氏、直義、義詮）が畿内・九州の寺院に奉納した仏像が、奉納者と等身大であったという記録から、等身大の神護寺三像（「伝源頼朝像」「伝平重盛像」「伝藤原光能像」）の像主が足利尊氏、直義、義詮とする説を補強する見解を示した。「粉河観音縁起絵巻」七巻本の成立圏」は、初期の足利将軍による粉河寺信仰と14世紀末における七巻本絵巻の成立事情を考察した。

藤原「東寺本『弘法大師行状絵巻』の披覧記事」（『造形のポエティカ』所収）は、14世紀末に成立した基準作例が、その後、中世を通じてどのように閲覧され、宝物としての価値を形成したかを文献の精査から明らかにした。

津田は、近江地方に現存する14世紀の真宗系作例の調査と報告を継続中である。

鈴木・高岸は、IIIFの画像を活用した絵巻の部分比較ツールの開発を行い、AIを用いた顔貌の自動認識による処理についても国際共同研究を加速している。

（2021年度）

2021年度末に刊行された辻惟雄、アン・ニシムラ・モース、高岸輝監修『ボストン美術館日本美術総合調査図録』（中央公論美術出版）は、2019年度に本科研の調査の一環として行ったボストン美術館における絵巻の悉皆的な調査内容を反映させたものである。今回の調査で確認された同館所蔵の絵巻は、総計94タイトルにのぼり、古代から近代にいたる原本・模本が含まれている。図録では、これらすべての作品のデータと解題を付し、主要作品の写真を掲載した。この中には、新たに見出されたものも数多く含まれることから、将来の絵巻研究に大きく貢献するものと考えられる。

また、フランス・フォンテーヌブロー宮殿美術館にて発見された江戸幕末の外交使節による絵画に関して、展覧会およびシンポジウムを開催し、中近世のやまと絵、および絵師の活動を俯瞰的にとらえる試みを行った。

IIIFを活用した絵巻の様式比較についても研究を深化させ、鈴木・高岸の共著で学会発表を行った。本科研による一連の研究は、人文情報学と美術史学を融合する新たな成果として注目されており、2022年3月に鈴木が情報処理学会より山下記念研究賞を授与されたことも特筆される。

津田による真宗系絵画および14世紀絵巻の詞書書風分析に関しても、清浄光寺に所蔵される古筆手鑑のなかから「遊行上人縁起絵巻」の詞書断簡が発見されるなど、新たな調査成果を蓄積しつつある。

上記の研究は、高岸を代表とする後継の科学研究費により継続する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 高岸輝	4. 巻 700
2. 論文標題 美術史 / 日本史の境界と越境の可能性 展覧会・美術全集・デジタル画像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 28-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高岸輝	4. 巻 961
2. 論文標題 「融通念仏縁起絵巻」明徳版本の版行・摺写と表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 330-334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 加須屋誠	4. 巻 874
2. 論文標題 書評と紹介「高岸輝『中世やまと絵史論』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 88-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木 親彦, 高岸 輝, 本間 淳, Alexis Mermet, 北本 朝展	4. 巻 2020
2. 論文標題 日本中世絵巻における性差の描き分け - I I I F Curation Platformを活用したGM法による『遊行上人縁起絵巻』の様式分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 じんもんこん	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Alexis Mermet, Asanobu Kitamoto, Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi	4. 巻 2020
2. 論文標題 Automated Face Detection for Pre-modern Japanese Artworks using Deep Neural Networks	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Assosiation for Digital Humanities	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi, Alexis Mermet, Asanobu Kitamoto, Jun Homma	4. 巻 2020
2. 論文標題 Analysis of difference between male and female facial expressions in Japanese picture scrolls using GM Method with IIIF Curation Platform	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Assosiation for Digital Humanities	6. 最初と最後の頁 90-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yingtao TIAN, Chikahiko SUZUKI, Tarin CLANUWAT, Mikel BOBER-IRIZAR, Alex LAMB, Asanobu KITAMOTO	4. 巻 2020
2. 論文標題 KaoKore: A Pre-modern Japanese Art Facial Expression Dataset	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 11th International Conference on Computational Creativity (ICCC'20)	6. 最初と最後の頁 415-422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木親彦, 北本朝展, Yingtao Tian	4. 巻 412
2. 論文標題 顔コレデータセット: 美術史研究分野における機械学習データセットの構築・公開の諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 191-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akira TAKAGISHI	4. 巻 117
2. 論文標題 The Development of International Research on Japanese Art History: With a Focus on Yashiro Yukio's Study of Illustrated Handscrolls	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井悠加, 藤原重雄	4. 巻 7
2. 論文標題 京都御所東山御文庫所蔵『壬生地蔵絵詞』(翻刻)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 禁裏・公家文庫研究	6. 最初と最後の頁 183-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田徹英	4. 巻 6
2. 論文標題 神奈川県立歴史博物館蔵 一遍上人像の画讃をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 パラゴネ	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原重雄	4. 巻 8
2. 論文標題 宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』二「臨時行幸」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 田島公編『禁裏・公家文庫研究』、思文閣出版	6. 最初と最後の頁 155-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi, Asanobu Kitamoto	4. 巻 2021
2. 論文標題 Style Comparative study of Japanese medieval picture scrolls focusing on landscapes using GM Method with IIIF Curation Platform	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JADH2021	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 鈴木親彦
2. 発表標題 人文学マイクロコンテンツ研究ツールとしてのIIIF Curation Platform
3. 学会等名 第14回CODHセミナー IIIF Curation Platform利活用レシピ100連発
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木親彦
2. 発表標題 人文学資料マイクロコンテンツ化による情報学・人文学の共同研究
3. 学会等名 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 (ROIS-DS)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 中世絵巻に描かれた霊地と国土 王者と聖者の見た風景
3. 学会等名 公開講座 続・古典を読む - 歴史と文学 - (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 伝統技術と最新技術で古美術を復元する
3. 学会等名 東京大学芸術創造連携研究機構発足シンポジウム「学問と芸術の協働 アートで知性を拡張し、社会の未来を開く 」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akira TAKAGISHI
2. 発表標題 Medieval Art, Patronage, and Inter-Contextuality
3. 学会等名 International Symposium in Japanese Literary and Visual Studies (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 ハーバード大学所蔵「源氏物語画帖」にみる土佐光信の構図と空間表現
3. 学会等名 シンポジウム「室町時代源氏絵研究の最前線」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 「遊行上人縁起絵」の画風検討を通じた十四世紀絵巻史の再構築
3. 学会等名 真教と時衆を絵巻から読み解く 中世絵巻研究の最前線(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津田徹英
2. 発表標題 詞書の筆跡から「遊行上人縁起絵」の制作年代を考える
3. 学会等名 真教と時衆を絵巻から読み解く 中世絵巻研究の最前線（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 室町將軍の身体観－画像と彫像の比較分析－
3. 学会等名 京都・等持院 歴代將軍像の謎に迫る（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木親彦
2. 発表標題 人文学資料からの研究データ抽出
3. 学会等名 ROIS/I-URIC若手研究者クロストーク
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木親彦
2. 発表標題 古典籍からデータを取り出す
3. 学会等名 文化資源学の未来プロジェクト：デジタル文化資源の未来
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chikahiko SUZUKI, Akira TAKAGISHI, Asanobu KITAMOTO
2. 発表標題 A Case Study on Digital Pedagogy for the Style Comparative Study of Japanese Art History Using "IIIF Curation Platform"
3. 学会等名 Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2018)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chikahiko Suzuki, Akira Takagishi, Asanobu Kitamoto
2. 発表標題 A Style Comparative Study of Japanese Pictorial Manuscripts by "Cut, Paste and Share" on IIIF Curation Viewer.
3. 学会等名 Digital Humanities 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高岸 輝
2. 発表標題 フリーア美術館所蔵「槻峯寺建立修行縁起絵巻」とともに歩んだ20年の旅(1998~2019)
3. 学会等名 「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」国際ワークショップ(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高岸 輝
2. 発表標題 戦国時代における霊場歴史と縁起・勧進・絵画
3. 学会等名 第71回 美術史学会全国大会 シンポジウム「聖地巡礼」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原重雄
2. 発表標題 「林原美術館蔵古筆手鑑の『明月記』断簡」
3. 学会等名 シンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事 お殿様と王朝文化」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原重雄
2. 発表標題 「石川三碧コレクションの『明月記』断簡」
3. 学会等名 「新発見! 『明月記断簡』 「てこくま物語」特別講演会」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原重雄
2. 発表標題 「奈良絵本に描かれたモチーフから考える 提灯を例に」
3. 学会等名 天理新善本叢書『奈良絵本集』発刊記念「奈良絵本は面白い!」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 王者の絵画と御用絵師1000年の終焉 将軍徳川家茂から皇帝ナポレオン3世に贈られた10幅の掛軸をめぐって
3. 学会等名 フォンテーヌブロー美術史フェスティバル、ラウンドテーブル「美術と外交、フォンテーヌブロー宮殿日本美術コレクション展」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤原重雄
2. 発表標題 歴博甲本「洛中洛外図屏風」に描かれた犬馬場
3. 学会等名 史学会大会・日本中世史部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 紀伊国の縁起絵巻と耕雲の役割
3. 学会等名 応永・永享期文化論研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 日本中世における顔を隠す表現とその意味 絵巻を素材として
3. 学会等名 第21回 文化資源学フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 多巻構成の絵巻における絵師の分担に関する検討 「顔コレ」とGM法導入による「遊行上人縁起絵巻」（清浄光寺甲本）の比較を通じて
3. 学会等名 第15回CODHセミナー「IIIFとAIで変わる美術史研究 - 大規模顔貌データの様式分析から読み解く日本中世絵巻」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高岸輝
2. 発表標題 絵巻に描かれた「喜び」 古代中世の夢告・法悦・救済・奇瑞
3. 学会等名 フロンテアヌブロー美術史フェスティバル、ラウンドテーブル「日本美術における 喜び とその表現」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計16件

1. 著者名 岩永てるみ, 阪野智啓, 高岸輝, 小島道裕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 150
3. 書名 「月次祭礼図屏風」の復元と研究	

1. 著者名 板倉聖哲, 高岸輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 羽鳥書店	5. 総ページ数 776
3. 書名 日本美術のつくり方	

1. 著者名 加須屋誠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 448
3. 書名 仏教説話画論集 下巻	

1. 著者名 ハルオ・シラネ, 鈴木 登美, 小峯 和明, 十重田 裕一, 高岸輝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 512
3. 書名 作者 とは何か	

1. 著者名 藤原重雄ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 神奈川県立金沢文庫	5. 総ページ数 112
3. 書名 武蔵国鶴見寺尾郷絵図の世界	

1. 著者名 藤原重雄ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 1129
3. 書名 造形のポエティカ 日本美術史を巡る新たな地平	

1. 著者名 高岸 輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 444
3. 書名 中世やまと絵史論	

1. 著者名 加須屋誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 仏教説話画論集	

1. 著者名 加須屋 誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 192
3. 書名 地獄絵ARTBOX	

1. 著者名 高岸 輝ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 神奈川県立金沢文庫	5. 総ページ数 120
3. 書名 西湖憧憬 西湖梅をめぐる禅僧の交流と十五世紀の東国文化	

1. 著者名 加須屋 誠	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 274
3. 書名 記憶の図像学	

1. 著者名 辻 惟雄、アン・ニシムラ・モース、高岸 輝、公益財団法人 鹿島美術財団	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 1012
3. 書名 ボストン美術館日本美術総合調査図録	

1. 著者名 東京大学文化資源学研究室、東京大学文化資源学研究室、東京大学文化資源学研究室	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 250
3. 書名 文化資源学	

1. 著者名 高岸輝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Editions Faton	5. 総ページ数 144
3. 書名 Art et Diplomatie: Oeuvres Japonaises du Chateau de Fontainebleau	

1. 著者名 有賀茜、石野浩司、梅沢恵、小倉嘉夫、木下竜馬、末兼俊彦、中司健一、長村祥知、西谷功、貫井裕恵、藤原重雄、堀川康史、山岡瞳	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都文化博物館	5. 総ページ数 240
3. 書名 よみがえる承久の乱	

1. 著者名 一般財団法人人文情報学研究所、小風 尚樹、小川 潤、纒田 宗紀、長野 壮一、山中 美潮、宮川 創、大向 一輝、永崎 研宣	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 496
3. 書名 欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	津田 徹英  (Tsuda Tetsuei)  (00321555)	青山学院大学・文学部・教授   (32601)	
研究分担者	藤原 重雄  (Fujiwara Shigeo)  (40313192)	東京大学・史料編纂所・准教授   (12601)	
研究分担者	加須屋 誠  (Kasuya Makoto)  (60221876)	京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・客員研究員   (24301)	
研究分担者	鈴木 親彦  (Suzuki Chikahiko)  (60803434)	群馬県立女子大学・文学部・准教授   (22302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	ボストン美術館			
----	---------	--	--	--